一般社団法人 日本考古学協会第80回総会

研究発表要旨

2014年5月17・18日

於　日本大学文理学部

一般社団法人 日本考古学協会

(35) ベトナム北部LUY LAU古城と清姜・参亜漢墓群の調査成果

黄暁芬・Nguyen Van Doan・Le Van Chien
Troung Dac Chien・Dinh Le Huyen・大賀克彦・中村大介

1．調査の概要

前漢の武帝はB.C.111年、南越国を攻略し、かわって９郡を設置した。以後、ベトナム北部は郡県制の支配を受ける。そのうち、交趾郡治とみられるLUY LAU古城（ルンケー古城）は紅河デルタの平原にあり、柚河の旧河道の東岸、北寧省順成県清姜社壟渓村に所在する。また、古城の東方には大小の漢墓群が群在する。これらの漢墓群は清姜・参亜漢墓群と呼称する。演者らは、LUY LAU古城と清姜・参亜漢墓群の実態の究明を目的として、2012年より日越共同調査を開始した。2012年の第１次調査と2013年の第２次調査では、古城および古河道のGPS調査と漢墓群の分布調査を行った。

2．LUY LAU古城の調査

LUY LAU古城は自然地形や水環境を利用して築造され、城壁と環濠をもつ正方位を志向した方形プランの城郭遺跡である。城内外には、磚や瓦といった建築部材や陶磁器類の破片が数多く散布する。漢代から南朝期の華南地域の影響が顕著である。

第２次調査では城内の中央部に大型の建築址が確認され、周囲には多量の磚や瓦が散乱していた。LUY LAU古城全体のGPS調査や遺物の散布状況から、古城の中央やや西寄りに大型建築址を中心とした内城の存在が推定される。2014年度の調査において内城を発掘調査する予定であり、古城の造営プランを検証したい。

3．清姜・参亜漢墓群の分布調査および測量調査

清姜・参亜漢墓群の西半部について分布調査を行い、32基の漢墓を認定した（図１）。かつては２倍以上の漢墓が存在したとされるが、農地の拡大と工場の設置でかなりの数が失われたとみられる。ただし、工場の敷地となっている東半部には一定数の漢墓が残存している可能性があり、その確認は今後の課題である。また、現状では支群への区分は困難である。

漢墓はいずれも墳丘を持つ。残存する墳丘の現状からは、墳形は円形で、規模には相違が存在する可能性が高い。比較的遺存状況が良好と考えられたM13およびM28について、測量調査を行った（図３）。現況は不整な円形で、規模はそれぞれ直径約18mおよび約19mである。ただし、墳端部の削平が激しく、正確な墳形や規模は明らかではない。

破壊を受けた漢墓のいくつかは埋葬施設の一部が露出している。確認できるものはすべて磚積みの室墓である。特に露出部分が多かったM28に関しては略測を行った。横長の前室に縦長の後室が続く室墓で、アーチ形天井を持つ。使用された磚は確認できる限りすべて菱格文の文様を持つ（図２－１・２）。

4．清姜・参亜漢墓群出土の磚

漢墓群からは帰属の明確な副葬品は知られていないが、墳丘上にはしばしば磚の散乱が認められた。そこで、漢墓群の造営過程を推定する資料として、14基の漢墓から合計33点の磚を表採した。墳丘上には現代の墓が造営されており、撹乱された磚も積み上げられていることから、墳丘間で移動されている可能性は否定できない。しかし、漢墓ごとに採集される磚の特徴はまとまるので、基本的には表採された漢墓に帰属すると判断した。

採集した磚のほとんどは菱格文の文様を持つ。菱格文は、Ⅰ類：文様の凹凸が強く菱形の長辺が短いもの（図２－１～３）と、Ⅱ類：文様の凹凸が弱く菱形の長辺が長いもの（図２－４～９）に区分される。Ⅱ類は薄い磚が多いが、厚くても文様の輪郭が明確である。Ⅰ類は後漢中期までも遡る可能性があり、Ⅱ類は三国時代を前後する時期のものと考えているが、さらに詳細な比較調査を必要とする。時期が古いM４とM28は離れて立地し、それらを中心に新しい漢墓が築造されていくという過程が復元される。より正確な年代と内容については、今後予定している発掘調査を通じて明らかにしたい。

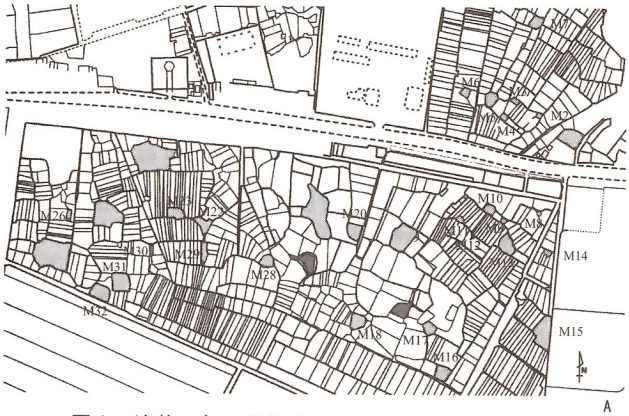

図1　清姜・参亜漢墓群の分布（縮小任意）

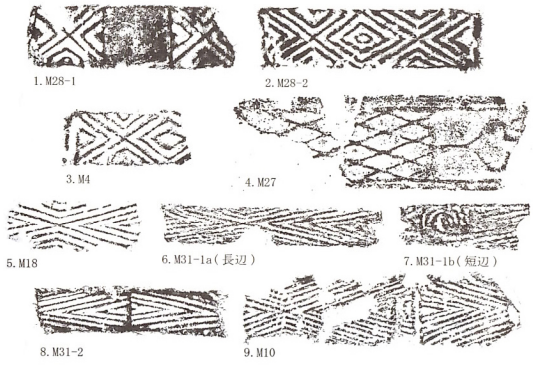

図2　墳墓採集磚（S＝1/6, M28, M18は墓室使用磚）

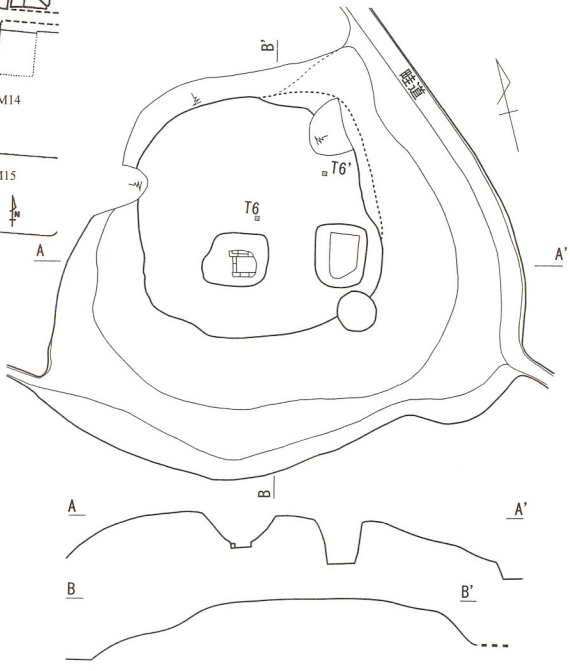

図3　清姜・参亜漢墓群 M28（S＝1/300）